

火車の誕生

勝田至

Birth of Kasha

KATSUDA Isumi

はじめに

- ① 中世の火車
 - ② 近世の火車
- おわりに

【論文要旨】

近代の民俗資料に登場する火車は妖怪の一種で、野辺送りの空に現れて死体をさらう怪物である。正体が猫とされることも多く、貧乏寺を繁昌させるため寺の飼猫が和尚と組んで一芝居打つ「猫檀家」の昔話も各地に伝わっている。

火車はもともと仏教で悪人を地獄に連れて行くことされる車であったが、妖怪としての火車（カシヤ）には仏教色が薄く、また奪われる死体は必ずしも悪人とされないう。本稿の前半では仏教の火車と妖怪の火車との繋がりを中世史料を用いて明らかにした。室町時代に臨終の火車が「外部化」して雷雨が墮地獄の表象とされるようになり、十六世紀後半には雷が死体をさらうという話が出現する。それとともに戦国末には禅宗の僧が火車を退治する話も流布し始めた。葬列の際の雷雨を人々が気にするのは、中世後期に上層の華美な葬列が多く見物人を集めるようになったことと関係が

ある。

猫が火車とされるようになるのは十七世紀末のころと見られる。近世には猫だけでなく、狸や天狗、魍魎などが火車の正体とされる話もあり、仏教から離れて独自の妖怪として歩み始める。悪人の臨終に現れる伝統的な火車の説話も近世まで続いているが、死体をさらう妖怪の火車の話では、死者は悪人とされないことが多くなった。人を地獄に連れて行く火車の性格が残っている場合、火車に取られたという噂がその死者の評判にかかわるといふ問題などから、次第に獄卒的な性格を薄めていったと考えられる。

【キーワード】 火車、地獄、猫檀家、葬式、雷

はじめに

近現代の民俗資料に見える火車は妖怪の一種で、葬列を組んで墓地へ向かう野辺送りの途中、黒雲とともに現れて死体をさらう魔物のように思われていることが多い。これが登場する昔話「猫檀家」もあるが、まず昔話以外のものを中心に、比較的古い採集資料からいくつか例をあげ、近現代の火車の特徴をみてみよう。

山形県最上郡最上町 「一六四 カシヤの怪 いつ頃の昔か。堺田の弥惣治家の婆様が、おまいり(死去)して、いよいよ出棺となった。朝からの上天気が昼すぎに変わり出して、墓所近くの一本大松まで来ると、天にわかにくもり、雷鳴がして風雨となり、ものすごい嵐となった。葬送の者たちがあわてふためいている中で、お寺様は、これは何か魔物のしわざに相違ないと、棺にまたがり経文をとなえ続けていると、その嵐は間もなくして、からりと晴れた。やれうれしやと、棺をはこぶと、あまりにも軽いので、フタをとって驚いた。中はもぬけのカラであった。これは、カシヤ(火車)という魔物で、その時のお天蓋が、五、六十里離れた宮城県のある村に吹き飛ばされて落ちてあつたという」

「二六五 古猫のカシヤ 死人をさらうカシヤとは、正体は年古くなった虎猫だそう。風雨をよび雲にのつてあるが、天からおりるときは大きな一本杉や松の木をつたって来るといふ。昔、ある高僧が墓地で、いま、引導みちをひこうとしているところ、にわかにかがくもって低くなり、雲間からカシヤが手をのばして来たので、僧は経文をとなえ続けて、カシヤの手を打ち払っていた。だが、ついには疲れて声が細くなると、棺はカラとなり、天が晴れ上って、安堵したものの、さすがの高僧も坊主頭を爪で引っ搔かれて血だらけ

となり、「トラヤアトラヤア」とただ一心に猫を呼んでいたそう⁽¹⁾」

福島県南会津郡檜枝岐村 「死体を盗みにくるカシヤとよばれる魔物がいると信じられ、棺を運ぶ途中で、これが棺にとつづくので棺の重さが軽くなったり重くなったりするといわれている。ただし、この村にはカシヤに死骸を盗まれたという実例は今までになかった。同郡田島町の方では実例があるという⁽²⁾」

群馬県 「刃物は、カシヤという魔物をよけるために置く。つまりカシヤの魂が仏に入ると仏が立つて歩くので(吾妻郡嬭恋村)、あるいはカシヤが死人をとりに来るので(勢多郡粕川村)、それを防ぐのだという。この魔物が死者を飛びこえたと死者が息を吹きかえず(群馬郡榛名町、山田郡大間々町)。生き返ったら箒でたたくと再び倒れるという(邑楽郡大泉町)。出棺のとき急に夕立が降るとカシヤが死者をさらいに来たという。カシヤは死人のにおいが好きで、険しい山の裏山に住んでいると信じられている(利根郡川場村谷地)。棺が急に軽くなったので中を見たら仏が消えていたことがあつた(榛名町)。このようにカシヤが死者や死者のすんでいる部屋に近づくことをさらうのである。カシヤとは猫の化物のことであるが、動物の猫が死者に近づくことも同様に嫌悪される⁽³⁾」

愛知県知多郡南知多町日間賀島 「死人の上に箴(はり)を上げる。マドウ(マド)—クシヤと云う百年以上の猫—がとりに来るので、目の多いものを上げるのである⁽⁴⁾」

徳島県三好市西祖谷山村日比原 「クワシヤ—葬式の時雷がなるとクワシヤが来た」と云う。クワシヤは猫だと云う人あり、猫死人に近

よる事をきられていた(前述)。野辺送りの途中で来た時は坊さんの七丈を棺にかければ防げる。「お前が死ぬ時はクワシヤが来るわ」と云って人を罵る事がある(日比原⁵)」

これらの例ではカシヤは猫のような怪物で、葬列の最中や墓場での引導のときに死体を奪うので棺が軽くなるという。またこのとき雷や黒雲が現れる。山形県最上町の二番目の例は「猫檀家」の一種である。群馬県、愛知県日間賀島、徳島県祖谷山の例のように、安置した遺体を猫が飛びこえると動き出すという俗信を背景に遺体の上に刃物などを置いて魔除けとする民俗の説明としてもカシヤが登場する。

カシヤは火車で、本来は地獄に落ちる人を連れて行く火の車であった。各時代の史料にその例が多い。右の民俗例でも徳島県祖谷山の罵りの言葉には地獄落ちと結びついていた名残りがみられるが、ここに示したように多くの事例では妖怪のカシヤは地獄とはにわかには結びつかないほど変容している。地獄への車から死体をさらう魔物まではかなりの距離があるが、これまでの研究ではカシヤが火車であることは認識されていても、死にゆく人の目にしか見えない火の車と死体をさらう妖怪との落差を埋めて、その変遷の過程を明らかにしたものは見当たらないようである。しかし中世史料を検討すると、地獄へゆく火車から死体をさらう火車へと変遷していくすが読み取れる。これにはいくつかの段階があり、それぞれ問題を含んでいる。まず死ぬ人の目にだけ見える火車が第三者にもわかる「客観的」存在にならなければならない。次に地獄へは死者の霊だけが行けばよいのに、その死体を奪うのはなぜか。またこの火車にどのような猫が結びついたのか、などである。以下順を追ってこれらの段階を検討してみよう。

① 中世の火車

1 臨終の火車

地獄の迎えとしての火車は中国仏教の著述にも見える。『大智度論』巻十四には、仏の足指を傷つけるなどした提婆達多がまだ王舎城に着かないうちに「地自然破裂。火車来迎。生入地獄」とあり、火車が迎えに来て生きながら地獄に落ちたとされる。また天台宗の開祖智顛は剡東の石城寺に赴き、ここで死ぬだろうと弟子に言いつて讚を作った。それには「火車相現。一念改悔者。尚得往生」の文があった(『浄土聖賢録』巻二、智顛)。

平安時代の往生伝や説話集にはこの智顛の讚のように臨終の人の目に火車が来るのが見えたが、念仏を唱えるなどすると火車は去って極楽の迎えが来たという話が多い。十世紀末の『日本往生極楽記』第十九話では、延暦寺の僧明靖が病になって弟子の僧を呼び、地獄の火が遠くに見えるから念仏三昧を修すべしと言ひ、僧を枕元に招いて仏号を唱えさせると、火は消えて西方の月が照らすのが見えたという。十二世紀前半の『今昔物語集』巻十五第四話では、薬師寺の濟源僧都が臨終に起き上がって弟子を呼び、火の車がやってきた、自分に何の罪があったのかと尋ねると、先年この寺の米を五斗借りて返さない罪だと鬼が言った、すぐ一石の米を寺にやってくれと言った。弟子がそうすると火の車は去って極楽の迎えが来たという。『日本往生極楽記』第九話にも濟源の往生説話があり、臨終に米を返させたことを記すが、火の車を見たとは書かれていない。

鎌倉初期の鴨長明『発心集』巻四第七話では、ある官腹の女房が病になって善知識を呼んだ。僧が念仏を勧めると女房は真つ青になり、恐ろ

しげな者が火の車を引いてきたという。僧が本願を信じて名号を唱えるよう言う、玉の車に天女が乗って迎えに来たと言った。しかし僧はそれにもついて行くなと命じ、女房は玉の車も去って何も見えなくなったとき、念仏を唱えて息絶えたという。火の車や玉の車は魔のはかりごとだとされているが、芥川龍之介は『六の宮の姫君』でこの話を使い、姫君は結局浮かばれなかったとした。

平康頼の『宝物集』巻七では、一生の間仏法を信じず罪を作った人が臨終になって初めて僧を呼び、火の車が見えたと言って悲しんだとして『火車自然去、蓮台即来迎』ととくは是也。こまかには法鼓経にぞ申たる」と評するが、この出典は不明確で、唐の道綽撰『安楽集』が「依法鼓経云。若人臨終之時不能作念。但知彼方有仏。作往生意。亦得往生」とするのが元になっているらしい。⁶⁾ただこの文には火車は見えないので、日本の説話形成の過程で当時の火車の通念が入り込み、誤った引用文が作られたのかもしれない。

鎌倉時代の説話には、他人を地獄に連れて行く者を夢に見た話がある。『古事談』巻四第二十一話によると、武勇で知られた源義家には懺悔の心がなく悪趣に落ちたという。病悩の時に家の向かいに住む女房が夢で、地獄絵に描いたような鬼形の者が大勢義家の家に乱入し、家主を捕らえ大きな札を先頭に引立立てていくのを見た。その札には「無間地獄之罪人源義家」と書いてあった。翌朝義家の様子を尋ねると、この暁に逝去したと言われたという。

源義家の話では獄卒だけで車は見えないが、『平家物語』巻六「入道逝去の事」では、平清盛が死ぬ前に妻の八条の二位殿（平時子）が夢に、猛火が燃える無人の車を牛頭馬頭が曳いて門内に入るのを見た。車の前には「無」と書いた鉄の札が立てられていた。どこから来たのか尋ねると、閻魔王宮からの使いだ、大仏を焼いた罰で無間（無間地獄）の底に沈めると沙汰があった、札の文字は無間の無だと言ったという。延

慶本（第三本、太政入道他界事）では清盛に仕えた女房が見た夢とし、またこの車は「火車」であると鬼神が言っている。

南北朝時代の『太平記』巻三十三「新田左兵衛佐義興自害事」によると、初代鎌倉公方足利基氏を輔佐する関東管領畠山国清が夢を見た。黒雲の上に太鼓を叩いて関の声を上げるような音がして、武蔵の矢口の渡で謀殺された新田義興が二丈ばかりの鬼になって牛頭馬頭などを従え、火車を引いて足利基氏の陣中に入ると見た。目覚めて夢のことを語るか語らぬうちに雷火が起こって入間川の在家三百宇と堂舎仏閣十か所が灰燼になり、その後も矢口の渡には毎晩光り物が出たので、近隣の人々が社を建てて義興を新田大明神と祝ったという。この話では火車のほか雷火という後の火車説話によくある設定も登場している。ただ新田義興の謀殺は延文三年（一三五八）、足利基氏は貞治六年（一三六七）に没しているので、義興が引いた火車はすぐに基氏を連れて行ったわけではないようである。

平清盛が死ぬとき高熱を発して看病の者も近くに寄れず、水風呂に入れても沸騰したという『平家物語』巻六「入道逝去の事」の記事はよく知られているが、鎌倉の執権北条泰時が仁治三年（一二四二）に死んだときも清盛のように熱気が責めて蒸すようだったという。冥火が燃えたためだろうか、人が近くにおれないほどだったという伝聞を京都の貴族は記し、「極重悪人之故歟、可憐々々」と評している（『民経記』仁治三年六月二十六日条）。泰時は今日では鎌倉幕府の名執権とされているが、承久の乱のときの京都攻めの総大将でもあるので貴族の心証はよくなかったのだろう。これらの例では火車とはされていないが、臨終の人を迎えにきた冥火が傍にいる第三者にも感知できるとされている点は注意を要する。

2 雷の火車

平清盛や北条泰時の臨終説話では地獄の火が看病する人々にも熱氣として感じられるとする描写が見られたが、これはある意味では、極楽往生のさいの聖衆の来迎が第三者にも「奇瑞」として感知できると古くから考えられてきたことと対応しているといえるだろう。往生伝に載せられた往生人の多くは、紫雲が部屋に入る、香気が漂う、微妙な音楽が聞こえるなどの奇瑞を傍の人にも感知させながら入滅し、それが第三者にとって往生の証拠とされていた。臨終の熱気はいわば奇瑞の地獄版である。

南北朝期の『太平記』の新田義興説話では激しい雷で村や寺院が焼失したが、これは火車が雷を落としたというより義興の怨霊としての活動を示しているようである。しかし十五世紀になると、現実の落雷や雷雨が火車のしるしだという解釈が古記録に現れるようになる。

伏見宮貞成親王の『看聞日記』（看聞御記）応永二十八年（一四二二）二月三十日条には次の記述がある。

卅日。雨降。（略）抑後聞。今夜石井村黒雲聳。其辺火炎燃出云々。人々見之。御香宮巫女家辺云々。此一村病者多之。若火車来歟。又火柱歟。何様ニも不思議也。不審々々。

この夜、伏見九郷の一つで現在の御香宮神社付近の石井村に黒雲がそびえ、そのあたりに火炎が燃え出たのを人々が見た。火炎は御香宮の巫女の家のあたりだった。この村には病者が多い。もしかすると火車が来たのだろうか。または火柱だろうか。いずれにしても不思議であると書いている。村の病者については、少し前の二月十八日条にこの春は疫病が大流行して万人が死んだので天龍寺や相国寺が施行したとあるので、石井村には疫病に罹った人が多かったのだろう。火車と火柱とが区別されているのはよくわからないが、現象としては黒雲の記述もあることか

ら落雷で火柱が上がったのであろう。それを聞いて「火車か」と書いているのは、病人が悪人であったため火車の迎えが来たことが第三者にもわかる形で現れたのが火炎であると解釈されたことを意味するのではないか。

後世の火車説話を念頭において考えると、この記述の火車は死体を取りに来たものかとも思われるが、この史料の文面からそこまで解釈するのは深読み過ぎるようである。葬送のときのことだという記述はないので、死亡時の火車と考えられる。この時代には火車による死体消失というモチーフはまだ成立していなかったのだろう。

御香宮の巫女の家付近に立った火柱が臨終の人を迎えに来た火車だとすると、火車は死にゆく人の主観のみに現れる存在から踏み出して「外部化」していることになる。そして十五世紀から十六世紀にかけては、葬儀のさいの天候を人々が気にして、もし雷雨でもあると死者が悪人だったからではないかと噂することがあった。奈良の興福寺大乗院門跡の日記『経覚私要鈔』宝徳四年（一四五二）四月十一日条には

一清覚得業観順房、今日葬礼也、大雨大風時分云々、於清覚者、如法雖穩便者也、依舎兄光宣律師悪逆無道、一家者共如此歟、不便く、

とある。清覚という僧の葬儀で大雨大風があったが、清覚は穩便な人物だったのに舎兄の光宣律師が悪逆無道であるために、同じ家の者もこのようになったのか、気の毒なことだと書いている。「このようになった」というのは大雨大風のことだが、それが兄の悪逆無道と結びつけられているのは、清覚も地獄に落ち、それが大雨大風になって現象したということであろうか。

文明五年（一四七三）、六月二十二日、応仁・文明の乱の東軍の総帥細川勝元の葬礼が悲田院内の地藏院で行われた。甘露寺親長は日記に「雨下、雷一声」と記した後には勝元の葬儀を記し、敵の山名入道（宗全

が三月十八日に死去したとき雷鳴がして雨が降った。今度の葬礼でもそうだ、不思議だと書いた(『親長卿記』 文明五年六月二十二日条)。親長は葬儀に参列したわけではないが、この日雷雨があったことを同日の細川勝元の葬儀に結びつけて考えており、山名宗全の死亡時の雷雨も思い出している。この時代の人々にとって死亡時や葬礼時の雷雨は葬儀の当事者でなくても気になり、記憶に残ることだったらしい。経覚が暗に述べているように、それが墮地獄の表象と想われていたからかもしれない。

十六世紀になっても葬儀のときの雷雨と墮地獄を結びつける感覚は続いており、奈良の興福寺多聞院の英俊が書いた『多聞院日記』に多く見られる。天文十二年(一五四三)五月三日条によると、春日社奥殿の下人太郎という者が去年から血を吐くようになり、この前日に死んだ。太郎は淫欲が盛んで、病になってから神主が夫婦を別居させたが、太郎の宿から妻の家へ毎晩猛火が通うという怪事があり、許可して二人を同居させたところ血を吐いて死んだという。この日は宗円房という僧の葬儀も正午にあり、そのときは晴れていたが、終わって太郎の葬儀になると雷電がして大雨が降り、雹まで降ったという。英俊は「造悪令然事可衆多ナル、浅猿々々」造悪が多かったためだろう、あさましいと書いている。

天文十九年(一五五〇)閏五月五日には奈良で八ツ時過ぎに雷電がおびただしく、大雨と霰が降った。七、八十歳になる者も記憶にないほどだったという。ある人が堀池の内の高の林という者の葬儀の最中だったと言ったので「彼仁ハ関取ニテアリシ、一生人ヲ悩せし故歟、浅猿々々」と多聞院英俊は書いている。「関取」は関所を持っていて関銭を収入にしていたという意味かと思う。この例でもまず雷雨や霰があつて驚くという経験が先にあり、その「原因」として当日に行われた悪人の葬儀が当てはめられている。

天正十年(一五八二)七月五日条では、昨日の大雨は産で煩って死んだ下御門のカウシヤ(麴屋か)の女の葬送の時分だった、「大地獄ノ先相、浅猿々々」と記す。産死した女も血の池地獄に落ちるとされた時代だったが、「大地獄」とあるのはそれだけでなく女の職業なども勘案しての評価なのかもしれない。後述するが近世では商売の不正が火車に取られる原因となつたとする話が多い。いずれにしても大雨が地獄に落ちたことの証拠とみられている。天正十八年(一五九〇)三月二十三日条では、京都の聖護院の奉行慶忠という者が頓死したが、葬儀のとき雷電大雨が激しかった。「一段大堅貪重欲ノ仁也シ、嘶云々」と英俊は記す。ここでも雷電大雨と「大慳貪重欲」が何の疑いもなく結びつけられており、言外に地獄に落ちたという判断が下されているようである。

これらの例では葬送のさいの雷雨が問題になっているが、それは墮地獄の表象とはされているものの「火車」とは表現されていない。『看聞日記』の火災は「火車か」と言われたが、これは臨終時と思われる。また中世の臨終の人の目に見える火車は当然ながら死ぬときに現れるのに対して、中世後期の雷雨はかなり遅れて野辺送りに出現している。これらの雷雨が「火車」と呼ばれないことを重視すれば、雷が地獄に落ちる者を衆人に示すような意志を持つと考えられていたのかもしれないが、雷は本来的に地獄と結びついた存在というわけでもないだろうから、やはり火車のイメージが背後にあるのだろう。

中世前期の葬列は人目を避けるように夜に行われ、京都の場合は京からいったん郊外の安置所に運ぶときは葬列ではなく平生の行列のようにすることも多かった。葬列の飾りつけも発達していない。これに対して中世後期には武士の葬儀が昼に行われるようになるとともに、多くは禪宗による葬儀の豪華さが競われ、龕、幡、天蓋などの葬具が発達し、また多くの見物人が集まった。梅雨時のように雨が降り続いていれば葬列も蓑笠などの準備をして行っただろうが、葬列が発したときは晴れて

いたのに途中で雷雨に遭ったら見栄を張った豪華な葬列も乱れてしまふ。墮地獄の表象としての雷雨が臨終時ではなく葬送の途中で出現するようになるのはこれと関係がある。有力者の野辺送りが人に見せることを意識した重要な儀式になると、それを乱す雷雨が遺族からも見物人からも心配されるようになり、もし雷雨があると何か死者によくない事情があった、つまり地獄に落ちたと考えるようになったのではないか。民俗例では青森県上北郡野辺地町で「この日（葬式の日―引用者）天氣が良いと良い往生だという。雷でもなると遺族がひどく気にやむ」といった。ひどく気に病むのは雷が墮地獄の表象であるという感覚が後の火車伝承と結びついて近代まで残っていたからだろう。

一方、第三者の側では生前に悪人と言われたような人に対しては雷雨で野辺送りが混乱するのを望む心情さえあったかもしれないし、さらに葬儀で雷雨があった場合、生前の人となりにかかわらず実は悪人で地獄に落ちた証拠だと思われることもありうる。『経覚私要鈔』の清覚得業は穏便な人物だったのに、葬送のとき大雨大風だったばかりに兄の悪業と結びつけられ、地獄に落ちたと思われてしまった。多聞院英俊が書きたいくつかの例の死者も、本当に生前に世人から悪人と思われていた人ばかりだったかどうか。

最上孝敬はカラダビ（空茶毘）。遺体は早く密葬してその後盛大な葬儀をすること（カラダメという千葉県匝瑳市（旧匝瑳郡野栄町）堀川で調査をしたが、カラダメの由来について「同地では華々しい葬儀の途中一天にわかにかきくもって疾風がおこり、火車が現れて棺内の遺体がさらわれたというさる旧家にかかわる伝説を説くので、同家に対する配慮からか、この特異な習俗のかつての存在を説くことを好まない様子があるのか）と述べている¹⁰。一方、同県香取市（旧香取郡小見川町）木内でもカラダビがあり、この由来として「木内の北方すこしはなれた所にある上小堀部落のある家で、通常の葬儀で墓地へむかう途中

一天にわかにかきくもって激しい雷鳴がとどろき、遂に落雷をみたが、それより一瞬早く側にいた僧が麻の衣を棺の上へ投げかけたので仏は無事であったという話」が伝えられているが、ここではカラダビについての話を憚る様子はなかったという¹¹。つまり火車（ないしそれに類するもの）に死体を奪われることは恥辱であり、死者が善人だったか悪人だったかの評価にもかかわるため、その実例があったとされても地域内で秘かに話されるたぐいの物語になるのに対して、僧の活躍でそれを退けたとされる場合はそのような不名誉は被せられないのである。この点に僧が活躍する火車退治の物語が近世に盛行する理由があるようだが、少し先回りしすぎたので再び中世史料に戻ることにした。

天正年間（一五七三〜九二）になると、雷が死体を掴み去るといふ噂が記録されるようになった。これも奈良の『多聞院日記』天正十一年（二五八三）六月十六日・十七日条には、

十六日、夜前大雨下了、（略）

一及晩大雷鳴消肝了、近年不覺事也、大雨下了、（略）

十七日、（略）

一昨夕ノ大雷神杉谷ノ枯タル大杉へ落テ、一夜焼、今朝ナラヨリ見付テ各出逢、則ソマ出テ切倒了、大凶事々々、南里ニ伊賀ノ人死タルヲツカミ取テ上了ト、

とあり、十六日の大雨と雷について翌日に「大雷神」が杉谷の枯れた杉に落ちて一晩中燃えた。今日奈良から行って見つけ、袖が伐り倒したが、この雷雨のとき南里で伊賀の人が死んだのを（雷神が）掴み取って上がったという話を書き留めている。ただこの書き方では、伊賀の人が悪人とされていたのかどうかはつきりしない。この時代の他の例からはそう推定されるが、近世の火車説話や「猫檀家」の昔話ではカシヤが妖怪化しており、悪人だから死体を取るといふ理由づけが失われているものが多い。

『多聞院日記』の巻四十三は「天文三年 夢幻記」と題され、天文三年（一五三四）から文祿三年（一五九四）までの間に多聞院英俊が聞いた異聞や説話、見た夢を書き留めた一篇であるが、その中に火車の話があった。天正丙子年（天正四年、一五七六）三月中旬、奈良の脇戸郷に「有力の夫婦慳貪無法の物」があった。女は妊娠したが子は多くいらぬといつて墮ろした。血の鎮まらないうちに下女が隠れて矢田の地蔵に参詣したのを女は怒って打擲すると、まだ血が鎮まらないので急死した。そして「葬送ノ日北乾ヨリ黒雲ムラカリテ悪風シキリニ雲中光り来ル、火車来テツカミ了トナン、眼前ノ現象可悲々々」ということになり、その後夫と子が夢に、広い野原の井戸に赤鬼がこの女をはめたり引き上げたりするのを見たという。

これは死体を奪うものを「火車」だとする話の初見であろう。この説話が天正四年当時に書き留められたのだとすれば、死体を奪う主体としては火車が雷より早く登場することになるが、いずれにしても中世末の奈良の世間話の世界では、葬送のさなかに何者かが死体をさらうという後世の火車説話に近い話が伝わっていた。これ以前の雷は本当に死体をさらうとは考えられていなかったようだが、ここに至って死体が奪われるというモチーフが出現している。死者が地獄に落ちるのに死体ごと奪う必要はないわけだが、このモチーフはどこから来たのだろうか。これがあることによりて火車が「死体を奪う妖怪」への道を踏み出す重要な転換点だが、今のところその由来を明らかにすることができない。最終時ではなく葬送の途中を狙って雷雨を仕掛けるのは死体を取るためだというように解釈が展開していった結果なのか、それともこれに影響を与えた別の話があったのだろうか。

また後世の火車説話と異なり、中世史料には火車が猫であるというモチーフは見られない。猫がどこから来たのかという系譜の追究も重要だが、歴史的には日本で猫が津々浦々にいるようになったのはいつごろか

という難しい問題もある。ある地域にまだ猫がいない時代に「猫檀家」の昔話は話されないだろう。

火車を禅僧が撃退するという、各地の寺院縁起や「猫檀家」でおなじみの話も天正（慶長）ころには成立していたようだが、これを含め火車説話の展開については次章で触れたい。

② 近世の火車

1 火車に引かれる人々

臨終に死ぬ人の目に見える火車については鎌倉時代から後の例をあげなかったが、近世までこのタイプの説話も続いている。これらの話では死ぬ人の目に見えたり、近親者の夢に現れたりするのは牛頭馬頭が引く炎が燃える車で、仏教的な火車のイメージがずっと保たれている。

中世の例として『満濟准后日記』応永三十四年（一四二七）六月二十四日条では、貴族の中院通淳が来て、先月ごろ清閑寺の寺僧が住坊に召し使っていた下女が悶絶し、大盤石が落ちてくるとか青鬼赤鬼がたくさん来て責めるとか言い、最後に「火車已ニ来候。参候ハテハ不可叶ニテ候哉。無是非事候。サ候ハ、参候ハム」と言って死んだ。眼前にこれを見た者が語ったとして満濟に話したという。

東寺の宝菩提院が蔵する説話集『漢和希夷』^{（カ）}は出典の一部が中国明代の『剪灯新话』であり、「新渡二剪刀ノ新話ト云書アリ」という記述から同書の渡来後まもない慶長（元和）（一五九六―一六二四）ころの成立とされる^{（12）}。この中の説話で、天文六年（一五六七）に駿河府中の屋形衆の朝日名孫八郎の隣家の男が伊豆の火金の地蔵（日金山東光寺）に参詣すると、朝日名の奥方が一人で参るのを見た。やせ衰えて青白く、自分に目もくれずに通ったのを不審に思ったが、にわかに黒雲が起り雷電

がして雲から火車が現れ、鬼神が奥方をつかんで火車に乘せて去った。地藏堂の別当に今のを見たかと尋ねると、こういふことはよくあると語った。府中に帰ると朝日名殿の奥方は死んで明日が初七日だと言われたという。

延宝五年（一六七七）刊の『諸国百物語』巻五第二話「二柵をつかひて火車にとられし事」では、西国巡礼が京都の誓願寺に参詣すると四十歳余りの女を牛頭馬頭の鬼が火の車から引き下ろして呵責し、また車に乗せて西の方に行った。巡礼が跡をつけると火車は四条堀川の米屋に入った。米屋の女房はこの四、五日煩つており、昼も夜も身が焼けると言つて苦しんでいるという。巡礼が見たことを話すと亭主は驚き、女房は欲が深くいつも二柵ふたすしを使った（米を買うとき大きな柵で買い、売るときは小さな柵で売る不正をした）、その罪で生きながら地獄に落ちたのだらうと言つてその場で出家になり、諸国修行に出た。妻はその後死んで家は絶えたという。

二柵を使う者の話は他にもかなりあり、寛文元年（一六六一）刊『片仮名本因果物語』中巻第五話「二舛ヲ用者雷ニ攫ル、事」では江州松原の後家が家に落雷して死に、野辺送りのときも雷雨になった。やっと薪に火をつけて帰り、翌朝行つてみると死骸を取り出して十間ほど遠くに捨ててあった。欲が深く二柵を使って一生を送つた科だという。また寛延二年（一七四九）刊『新著聞集』第十四、殃禍篇「逆風家に入り貪姥首をうしなふ」では信州松本領の善治の母が二柵を使ったが、山里の窮民はそれを知りつつ借りていた。延宝初年、婆が炉に生木を焚いていると大風が吹いて入口の戸を炉の上に吹き落とし、火も消えた。灯をともして見ると婆は首を抜かれ胴だけになっていたという。これらは臨終の目に見える火車ではないが、二柵との関連であげた。

天和三年（一六八四）刊『新御伽婢子』巻一第六話「火車の桜」。大坂に近い平野に老夫婦があり、娘が二人いたがみな嫁に行った。母が

煩つたので二人の娘が実家に戻つて昼夜看病し、少しよくなったので二人とも帰つたが、その夜二人の夢に牛頭馬頭の獄卒が火車を引いて母を乗せ、責めながら連れて行つた。娘たちが車を引き止めて庭の桜の木に結びつけると、綱も桜も燃え切れて火車は帰つていくと見た。二人とも同じ夢で、覚めても手のひらが熱かつた。二人が急いで親元へ行くといふま死んだという。なきがらは悪相で、庭の桜は枯れしぼんでいた。つないだ縄目の跡もはつきり残つていたという。この話では夢で火車を結びつけた桜の木が実際に燃えて枯れていたこと、手のひらが熱かつたことを記し、火車の炎や熱が現実世界に痕跡を残している。

天和四年（一六八四）の序がある『古今犬著聞集』巻九「火車乗事」では、編者の親が召し使つていた西京出身の下女の伯父が長く煩つたが、死ぬ七日前から青い鬼の姿の者が来ると言つて泣きわめいた。七日目に「あらくるしや、其火の車にのれとや、かなしや、ゆるしたうへよ」と手すり足すりし、「とかく参りてハ成ましきとにや、是非なき事哉」と言いきま、足腰の立たない病人が立つて走り出ると門口の敷居につまずいて倒れ死んだ。下女が常々これを語つては泣いたという。この伯父の言葉は二六〇年前の『満濟准后日記』の下女の言葉とそっくりである。臨終に火車を見た者の最期の言葉として定型化して長く伝えられていたのかもしれない。

享保十年（一七二五）刊『続礦石集』巻上第七話「孝女我母の獄卒に捕られ火車に載られたるを見たる事」の条にも「火車の桜」の類話が二つある。一つは出雲の松江藩士堤家の下女が夜中に叫び、夢で母が火車に乗っているのに出会い、鬼の命令で車を引かされたといつて胸を開くと軛の当たつた胸を火傷していた。母は慳貪邪見だったが娘は親孝行で泣き崩れるのを主人がなだめていると、夜更けに使いが来て母の死を告げた。いま一つは大和の法隆寺近くの村の女が夢で母が火車に乗せられていくのを止めようとして手を焼いたとする。

宝暦四年（一七五四）刊の『西播怪談実記』巻三「竜野林田屋の下女火の車を追ふて手并着物を炙し事」では、播磨龍野の林田屋という商家に入りする老婆が熱病になり、林田屋に仕えている婆の娘が看病するうち「ああ母を乗せて行く」と言つて何かを止めるように表へ走り出ると病人は死んだ。娘の袖の下に火がついており、右の手のひらが焼けただれていた。火の燃える車を鬼が引いて母を火の中へ投げ込み、表へ出て行くのを止めようとしたが車は虚空へ去つたと語つたという。

また安政三々四年（一八五六〜五七）成立の『尾張霊異記』初編中巻に収められた話では、名古屋の上宿天神町の商家の下女が寝所で叫んだ。主人が尋ねると、母が火の車に乗つていくのを見た、引き下ろそうとしたができなかつたと言つて泣いた。両親とも火傷していたので主人夫婦が驚いていると、下女の在所から母が先刻死んだと告げがあつた。いずれも娘が火車に乗せられて行く母を止めようとして火傷しているが、特に『続礦石集』の出雲の話と『尾張霊異記』はよく似ている。同じ話が伝播しているのだろう。火車に乗せられるのはここでも女性だが、なぜ火車に乗せられるのかは『続礦石集』の出雲の話で「慳貪邪見」とされる他は説明がない。

近世説話全体では必ずしも女性が多いわけではなく、宝永八年（一七一）刊『善悪因果集』巻四の「正法ヲ誹謗スル者火車来現ノ事」では中京の商人が日蓮宗徒になり他宗を誹謗すること甚だしく、親に先立つて死んだ浄土宗の息子の仏像経巻を破却したが、命終に臨んで鬼が来た、火の車が見えると叫び、意識不明になって死んだとする。

前述の『続礦石集』巻上第八話「師匠を殺し金を偷める人現罰火車焔魔王の使を得たる人」では高野山の僧が酒色博奕にふけり追放されたが、舞い戻つて師匠を殺し二百両を奪つた。師僧の縁者は公儀への告訴は高野山の恥だとして仏罰に任せた。僧は金を使い果たして番太郎になつたが、最後は狂乱して火車が来ると一か月余も叫び、井戸に落ちて

死んだという。これに続けて類話を記している。流罪になつた高野山の僧が赦免されて故郷に帰る途中で伊勢国に宿つた。亭主は僧が金を持っているのを見て殺して金を奪い、僧は行き倒れたと披露したが、一周忌に閻魔王の召し状が届き、僧の訴えて明日汝を呼び取ると言つた。翌日の未の刻、空から羅刹が現れて亭主を連れ去つたという。

寛延二年（一七四九）刊の『新著聞集』第十、奇怪篇「火車の来るを見て腰脚爛れ壊る」では、武州騎西に近い妙願寺村の酒屋安兵衛がある時大道へ飛び出し、やれ火車が来るわと叫んで倒れた。それから煩い、腰から下がただれて十日ばかりで死んだ。二、三軒隣の者は炎が燃え上がるのを見たという。

享保十一年（一七二六）刊の『諸仏感応見好書』には火車の話が二話載せられている。巻上「慳貪」の話は、天正（一五七三〜九二）のころ某国の酒屋の妻が慳貪で、息子が諫めたが聞き入れなかつた。息子は家を捨て高野山に入った。母は自分で酒を量つたので枘の罪（二枘を使うということだろう）が深かつた。人の薦めで寺の説法を聴聞したが、ひたすら居眠りした。そのときの夢で家に帰り、大蛇になつて金箱を巻いていたという。死ぬときは悪相を現し火車に遭つた。これは女性で、前述の『諸国百物語』の米屋の類話といえる。

巻下「救亡者」の話は、同書の編者が天和のころ相州の山寺に宿ると、夜に門を叩く者がいた。自分は何某でいま命終した。牛盗人で、一生牛馬を盗んで渡世したが、自分のために宝篋印陀羅尼を唱えて火車の難を逃れさせてくれと言つた。住僧が仔細なしと言つて一心に誦すると亡魂は徳に和して光明かがやき、葬式も支障なかつた。この者はこの寺の檀家だつたという。この話の死者は男性である。

文政八年（一八二五）初演の鶴屋南北『東海道四谷怪談』大詰でも、お岩の亡霊に悩まされる伊右衛門が庵室から刀を抜いて飛び出し「ア、夢か。ハテさておそろしい。まだしなぬ先、この世から、あの

火の車へ。南無阿弥陀仏」と言っている。

臨終に火車が現れるのはどのような罪によってなのか。これらを一覽すると、女性の場合には特に理由を示さないことも多い。単に性格の問題とされているのだろうか。近世には「火車婆」なる語があり、悪心の老婆をいうと辞書にある。『日本国語大辞典』は雑俳『二息』の「火車祖母が野送り義理の講中間」などの例を挙げる。「火車」だけでも同じ意味の用法があり、『和訓栞』は「くわしゃ(略) 俗に悪心の老婆をいふは、因果経に今身作後母諛尅前母兇者死墮火車地獄中と見えたり。此に本づきたる詞也」と説明する。『善悪因果経』にはここに引かれたように継子をいじめると火車地獄に落ちるといふ仏の言葉が見えるが、説話を眺めているとそれだけが典拠となつてきた語でもないように思える。

「はじめに」で引いた徳島県祖谷山の民俗誌は、『お前が死ぬ時はクワシヤが来るわ』と云つて人を罵る事がある」と記していた。話者が念頭に置いていたのは男だったか女だったか。

女性で火車に引かれる理由があるときは二枘を使うとされることが多く、「慳貪」の典型のように扱われている。男性では誹法(善悪因果集)、不正な商売(新著聞集の酒屋はその可能性がある)、殺人(続礦石集・東海道四谷怪談)、牛盗人(諸仏感応見好書)などさまざまであるが、具体的な不正行為を記すことが多い。女性は家にいるので、「慳貪邪見」であつても二枘を使う以外に悪事をする機会がなかったのか。

これらを中世の源義家、平清盛、北条泰時などに比べると小粒になつた感が否めないが、武士一般に対する反感は近世社会ではあつても表に出せないし、支配者の恣意的な収奪や処刑も少ない。また大罪人でも磔にされたら臨終に火車を見る暇もなく死んでしまうだろうし、教訓を与える説話としては処刑だけで十分であろう。つまり法網にかからずに暮らして病死するような人で、しかも財力があつて商売や金貸しを営み、

その過程で不正があつたのではないかと人に思われやすい人物や、性格上の問題で人に嫌われているような人が説話の中では火車に襲われるといえるだろう。近世に治安が改善して罪人が現世で処罰されることが多くなつたことの表れという面もあるだろうが、ここにあげた事例を通覧すると火車の恐ろしさが生前の所行に対してややアンバランスな感もある。

2 禅僧と火車

近世の火車説話や「猫檀家」の昔話では葬送のさなかに死体を奪おうとする火車を阻止する禅僧の活躍に興味の中心があるものが多いが、禅僧との組み合わせは中世末か近世ごく初期(慶長ごろ)には成立していた。堤邦彦は長野県佐久市前山の曹洞宗貞祥寺の開山節香徳忠の伝を記す『貞祥寺開山歴代略伝』は慶長(一五九六〜一六一五)以前の成立とするが、雪香は前山城主伴野光利の子で、「子育て幽霊」型の出生譚を持つ。光利の招きで大永元年(一五二二)貞祥寺を開く。近くの小宮山村に柏山宗左衛門という狩獵を業とする暴悪の者がいたが、ある日奇異な容貌の武士二人が寺に来て、三日後に宗左衛門が死ぬが、師は葬儀に呼ばれても応じてはならない、われらが地獄に連れて行くと云つた。三日後果たして葬儀に招かれたので行くと、青天に黒雲が起り雷電が震動した。雪香は念珠で棺を打ち働を詠むとまだ終わらぬうちに空は晴れたという。

これに似た話としてはやはり堤邦彦が紹介した尾張福厳寺の盛禪洞(しやく)嵬が延徳年中(一四八九〜九二)盗賊の首領の葬儀で雷雲の中から声が出たのを棺の上に座して退けた話(元禄六年(一六九三)序の『日域洞上諸祖伝』巻下)や、下野鶏足寺の開山天海舜政が大永七年(一五二七)、悪人の屍を奪おうとした山の神を退けたものの七日後に示寂した話(享保二十年(一七三五)序の『日本洞上聯燈録』巻八)がある。こ

の二話の僧はいずれも中世の人だが、伝が記録された書は後世のもので伝承が中世に遡るものかは不明である。ただこれらの話では死者はいずれも悪人であり、またそれを襲うものは必ずしも妖怪とされてはいない。貞祥寺の雪香徳忠に警告した異相の武士は自分たちが宗左衛門を地獄に連行すると言っているから獄卒であろう。盛禪洞夷が引導したのは盗賊であり、殺人や放火も犯していた。空の声は「極重悪人天將罰。禪師不許。我等空去」と言い、笑い声を残して去ったという。このような悪人が処罰されずに死んで、高僧を招いた葬儀を営むことができたという設定は中世的である。天海舜政が対決した山の神はその前には天海の能筆を敬い、その右腕を数日間借りたためその間は天海の手がしびれていたというエピソードがあり、また死者は悪人なので屍を奪って罰するのだから葬儀に行つてはならない、無理に行けば死ぬだろうと警告している。これらの話では、地獄に落ちるべき罪人をも救うことができる禅僧の法力に重点があり、死者が悪人であるという設定が保持されている。

これに対して同じく近世初期の『漢和希夷』に載せられた越後上田庄の雲東庵の長老の話は事件を天正二年（一五七四）とし、檀那の引導でにわか雷雨があり、黒雲が龕の上に落ちかかり死人を掴み上がろうとしたのを長老が死人の足に取り付き、いっしょに空に引き上げられたがついに死人とともに地に落ちたので再び龕に納めて下火を遂げたという。「其辺二高山アリ、黒雲繫ル時ニ動、火車来ル事有り」と記しており、この黒雲は「火車」だとされている。ただこの話では死者の善悪が記されず、話の興味の中心は和尚の活躍にあることから、雷雲は独自の意志で死人を取る「妖怪」に近付いているともいえよう。火車が「高山」にいたのは雷雲が湧いてくるからで、天海舜政が戦つたのが山の神だったのも雷雲を発生させるからだろう。

なお雲東庵は正しくは雲洞庵という新潟県南魚沼市の曹洞宗の名刹

で、天保十二年（一八四二）に刊行された鈴木牧之の『北越雪譜』二編巻三「北高和尚」は火車を撃退したのを十世北高和尚とし、血痕のある「火車落の袈裟」の由来を説くが、現在も同寺にはこの袈裟が伝わっている。ただ実在の北高全祝は永禄末年に武田信玄の招きで信濃に赴き、以後そこで活動しているので、天正二年という『漢和希夷』の記述を生かすなら北高に当てるのは問題もあるが、慶長ごろから雲洞庵の高僧の火車退治説話が語り伝えられていたのは事実であろう。

鈴木正三の談話を弟子が書き留めた『驢鞍橋』は万治三年（一六六〇）に刊行されたが、この中巻第七十四条には曹洞宗の三箇寺が徳川家康の前で咄をしたとき、在江（在郷）で火車が亡者をつかむのを落とした導師があつたと語つたところ、家康は「なぜくれてやらなんだ」と言つたので長老は言葉に詰まつたという話がある。これは北高和尚のことかもしれない。

自ら火車に取られる禅僧の話もあり、寛文元年（一六六一）刊『片仮名本因果物語』巻下第十一話「悪見二落タル僧自他ヲ損ズル事」では、正保年中（一六四四～四八）美濃の八屋（美濃加茂市蜂屋）の臨済宗関山派の長老快祝が多くの人に悟りを授け、わが心のほかに仏なしと言つて神木を切り、仏像を破却した。死んで出棺しようとする雷雨になり、火車が来て死骸を掴んで行つて捨てたという。曹洞宗の臨済宗への対抗意識がうかがわれる。

これら近世初期～中期の書物に載せられた高僧譚では黒雲が「火車」とは呼ばれていないことも多いが、『漢和希夷』『驢鞍橋』『片仮名本因果物語』では「火車」の語が用いられており、時代が下がる『北越雪譜』も「火車落の袈裟」と書いていた。他の例でも死者が悪人だとするのが普通であることから、死体を奪うものは仏教の火車であるという意識があつたものと見られる。ただ火車が猫であるという設定はどの話にも見られない（時代が下つた『北越雪譜』の北高和尚譚では尾が二股の

大猫になっている)。

古浄瑠璃の『牛王の姫』は、『東海道名所記』巻六によれば京の四条河原で次郎兵衛(淡路丞)が西宮の夷かきを語らい、鎌田正清のことや「がうの姫」、阿弥陀の胸割りなどを語ったとされており、慶長年間(二五九六〜一六一五)の初演とされるものだが、当時の正本は伝わらない。新日本古典文学大系所収の寛文十三年(一六七三)刊本によると、牛若が朱雀権現堂の父義朝の墓に参った帰りに牛王の姫の家に雨宿りした。姫は義朝の郎等鎌田正清の妹で牛若に恋するが、話を聞いた伯母の尼公が牛若がいることを清盛に訴え出る。牛若は龕に入って逃れ、姫は清盛に拷問されて自害する。清盛は姫を牛王の宮として祀り、伯母の尼公の所行を憎んで牛裂きにした。すると「天俄にかき曇り 車軸の雨降り 尼公が死骸を掴み行 上下万民をしなべ憎まぬものこそなかりけり」という。尼公の死骸を掴んだ主語が不明確だが、挿し絵では「あつきにかうをつかむ」(悪鬼尼公を掴む)と書かれており、絵は雷神のように描かれている。

これは高僧譚ではなくまた「火車」の語も見えないが、死体を取られるのは悪人である。またここでもまだ猫の姿はない。近世初期ではまだ火車の正体が猫とはみなされていなかったようである。中世末の『多聞院日記』に記された死体を奪う雷の説話がまだ生き続けているともいえるだろう。死体が奪われる話は中世のものは『多聞院日記』しか残されていないため大和の事例が古いように見えるが、信濃貞祥寺や越後雲洞庵の事例から考えると中世末には東日本を含めた各地で初期的な死体消失譚が流布していたのかもしれない。

禅宗の高僧が火車を撃退した話は曹洞宗では寺の事跡ともなり、前述の雲洞庵の火車落としての袈裟のように宝物が伝わっていることもあった。各寺院で共通の説話が伝えられた背景として、曹洞宗で広く行われた切紙伝授の中に「火車落切紙」があったことを切紙を批判した面山瑞

方が『洞上室内断紙棟非私記』に記しており、埼玉県大里郡寄居町の正龍寺に伝わる正徳五年(一七一五)の「宗門魔弘大事」には太原和尚が焼香のとき虚空から手が出て死人を取ろうとしたのを退けた話が記される⁽¹⁶⁾。応安四年(一三七二)に示寂した太原宗真は峨山韶碩^{がざんじょうせき}の高弟で曹洞宗の大きな門派を形成したが、太原が実際に死人を取る怪物を退けたことはもちろん、その時代に死体を奪う火車の話がまだ成立していなかったことも、これまで見てきたことから明らかである。しかし曹洞宗内で過去の高僧に仮託しながら火車退治の話が広まっていった一端をうかがうことができる。

3 猫の火車

十七世紀末から十八世紀初頭になると、猫が葬送のさい火車になって死体を奪う話が登場する。しかもこれはきわめて昔話の「猫檀家」に近いのである。

議論の前提としてまず「猫檀家」の例を『新版 静岡県伝説昔話集』から一つ紹介する。

四八四 猫の恩返し(周智郡城西村・現磐田郡佐久間町)

ある所に位のあまり高くない僧が一人で住んでいて一匹の猫を大変可愛がって飼っていた。しかし、だんだん僧は貧乏になって、可愛い猫さえ飼う事が出来なくなったので、猫に向かって「お前もずいぶん長く大事にして飼ってやったけれども、もう今は飼う事も出来なくなった。今になってお前を手離すのも辛いけれど、どうも仕方ないから、どこへでも好きな所へ行って幸福に暮らしてくれ」と言った。そうすると、猫はしばらく悲しそうにしていたが「それでは私も無理にいても仕方がないからどこかへ行きますが、一つ御恩返しをしたいと思います。もう少しすると、今病気で寝ている庄屋さんのおばあさんが死にます。そうすると、私はその葬式の日

にかしゃになって、そのおばあさんをまき上げ、誰が祈っても、戻りませんが、あなたが祈ればすぐ降ろしますから」と言って、それきり姿を消してしまった。数ヶ月すると、果してそのおばあさんは死に、葬式の日になると俄に黒雲が出て激しい雨が降り出した。そして、そのおばあさんの死体は、するすると空へ上って行った。さあ大変と大騒ぎになり、色々位の高い僧が幾人もで祈ったけれども少しも下りて来そうな様子がなかった。致し方なく、位は高くなくともと言って、例の僧が祈ると、不思議や、死体はするすると下りて来て元通りに棺の中へ納まった。それからその僧の評判は一時に高まり、大いに出世したという。(伊藤こと)⁽¹⁷⁾

「猫檀家」の典型的な話はこのように貧乏寺の和尚に猫が話をもちかけ、寺を繁栄させるために両者結託して火車の事件を仕組むことになっている。このような典型的な「猫檀家」を以下、便宜的に「結託型」と呼ぶことにする。この例には出てこないが、僧が「とらやーやー」という経を読むと棺が地上に下りるとい語り方もことに東北地方では多く、禅宗でよく読まれる『大悲呪』の冒頭句「なむからたんのう とらやーやー」が印象深かったことを示している。「はじめに」で挙げた山形県最上郡最上町の例では「トラヤアトラヤア」を「猫を呼んでいた」言葉だとしていた。この例では猫が策を授ける部分がないのに最後に猫を呼んでいるので、典型的な話が崩れたものと思われる。『大悲呪』の影響で猫を虎猫とする話例も多い。「猫檀家」は『日本昔話大成』⁽¹⁸⁾では第六卷の「動物報恩」に各地の例がまとめられており、福田晃⁽¹⁹⁾や山田巖子⁽²⁰⁾の研究がある。

さて猫が登場する火車説話で最も古いものはこれも堤邦彦が紹介した元禄六年(一六九三)刊『礪石集』巻一第十五話「猫火車と成て人の死骸を取事」であろう。著者は真言僧の蓮体(惟宝)で、書名は鎌倉時代の無住の『沙石集』にならったものである。洛陽の浄土宗の寺の長老が

猫を三十年も飼っていたが、ある夜障子の外から人声がした。猫が出て行って人間の言葉で話をしたが、先方は怒った様子で帰った。和尚が猫を捕らえて問い詰めると、猫は数十年を経れば必ず化ける、自分は京中の猫の長で、悪人が死ねば火車となって死骸を取る党の主宰だ。導師の檀越の尼公が明日死ぬが、邪見放逸なので朋輩が死骸を取る評議に来た。しかし導師に恥をかかせることはできないと断ったので朋輩が怒ったのだと語った。長老は驚き、死骸を取るとき恐れるものがあるかと尋ねると、数珠ほど恐ろしいものはない、中でも達磨の数珠で打たれると多くは死ぬと語った。長老は明日は力を尽くして死骸を取れ、我も取られないようにすると言い、猫も喜んでまた外に出て行った。翌朝尼公の死が告げられ、猫の姿は見えなくなった。長老が引導に出ると青天にわかにかき曇り雷雨となったが、雷が棺の上に落ちた瞬間長老が数珠を投げると空は晴れた。棺を開けると何事もなかったので人々は長老を賞賛した。三日後猫が寺に帰ってきたが、達磨で打たれたと見えて一眼が飛び出していた。療治したがついに死んだ。最後は「此事洛陽の老宿。物語せられしま、書付侍るなり。此猫年久しくなりて。魔民となれるなるべし。世に邪見の人の死せるにハ。葬の時雷電するあり。猫酋の所為にや。一可畏しき事どもなり」と結んでいる。

この十年ほど後の元禄十七年(一七〇四)に刊行された浮世草子『多満寺太礼』巻四「火車の説」も似た話である。前置きとして往古東国では人が死ぬと屍を奪い、引き裂いて木の枝にかけたり、首や手足をもちだり、屍を擱んで虚空に失せるものがあり、これを火車と名づける。関東に限らず諸国にも稀にあったが、今は仏神の信心が広まったので少なくなつたとする。上野国の名古屋に宗興寺という禪寺があつた。住持は古くから一代を保つことがなく、常は無住だつた。そのわけは、この里の大座村はこの寺の檀越だつたが、代々の名主が死んで葬礼に赴くと、黒雲が覆つて屍を擱んだ。そのため数人の住職が寺を出ることに

なった。周巖長老という僧がこれを聞いてはるばる来て住持を望んだ。人々は喜んだが、程なく名主が重病になった。長老が座禅観法に入っていると、深夜に寺に飼っている斑の猫が友に呼ばれて出て行った。友猫は名主が今夜死んだ、例のように取るから出てくれと言くと、寺の猫は住持の心が例のようでないので連衆を外してくれと言った。長老が猫を捕まえて叱責すると猫は飛び出した。翌日野辺送りのとき黒雲が棺の上を覆ったが、長老が野良猫めらと叱ると空は晴れた。名主の子息は罪業が晴れた思いがして長老を尊崇した。その後近郷近在まで猫を集めて遠郷に捨てたという。なお名古、大座村、宗興寺とも地名辞典に見いだせず、創作地名と思われる。

この二話では死体を奪うものの正体が寺の猫であり、かつ和尚は猫が死体を奪うことを知っているのが結託型の「猫檀家」と非常に似ている。しかし和尚は猫と結託しておらず、猫と戦って退治するという点では違いが見られる。二話を比べると『礪石集』では「火車」の語を用いるとともに、邪見放逸の死者を取るとする点で伝統的な火車説話との連続性を持っている。編者が僧侶であることと関係しよう。これに対して、『多満寸太礼』では「火車」の語は用いているものの、前置きの説明は全くの妖怪としてのそれで、仏教的な色彩は見られない。これが当時の一般の通念を示したもので、死体を奪う火車の「脱仏教化」は十八世紀初頭にはかなり進展していたと見なければならぬ。また奪う死体も代々の名主のもので、死者の善悪の設定は消滅している。猫の性格づけも微妙に異なり、『礪石集』の猫は悪人の死体を取るだけあって住持に恩義を感じており、そのため最初は仲間の誘いを断り、また自分の弱点も教えている。

二話に共通する設定で、かつ典型的な「猫檀家」に見られないのは、猫の仲間があり、その付き合いで死体を取るという設定である。結託型では猫が自分から和尚に火車の話をもちかけるが、二話の和尚は猫と結

託していないので、猫同士の会話から死体を奪うことを知らなければならぬ。また『礪石集』ではこれは死体を奪う役目と和尚への配慮との板挟みになった猫が和尚に事情を説明する理由としても機能している。

この二話のような話と結託型「猫檀家」とはどちらが先にできたのだろうか。これらのような話をひねって両者結託するように変更して「猫檀家」が生まれたのか、それとも「猫檀家」の話の方が先に流布しており、これではあまり和尚の名誉にもならないと思った誰かが結託を解除して、このような話を作ったのだろうか。

まず指摘したいのは、この二話と結託型「猫檀家」とはリアリティのレベルが異なることである。この二話は近年起こった事実談として読めるように書かれている。しかし結託型の「猫檀家」はそう語ることが困難である。火車の真相は和尚と猫だけの秘密であり、昔話の中ではその秘密は保たれている。しかしその世界の外にいる聞き手は、その秘密を知っている。昔話あるいはフィクションならこれは可能である。しかしこれをそのまま事実談（世間話）にしようとする、和尚や猫と聞き手が同じ現実世界にいることになるから、秘密が漏れたとしなければならぬ。この秘密を知ったら、和尚を尊崇して寄進をした庄屋や恥をかかされた多くの坊さんは何と言うだろうか。遠い昔のこととしたり、皆が猫の報恩に感動したとすれば破綻を最小限にできるかもしれないが（「猫檀家」の中にも実在の寺院の昔の出来事として伝説化して語るものが少なくない）、最近の出来事としてリアルに語るのは難しいだろう。それが可能なのは和尚が人をだましたりしない二話のような構成にする場合である。このことからただちに両者の先後関係を判断することはできないが、よく似た話であるにもかかわらず両者が同じ平面上にないことは意識しておかなければならない。つまり、結託型の「猫檀家」は近世に非常に多く書かれた実話風怪異譚や随筆の世界に入り込むことが難しいところにいる「話」である。

『礦石集』の話は猫が和尚に自分の弱点を教えており、このため真剣勝負でありながら筋書きが決まっているところがやや不自然な印象を与える。これは結託型の昔話の影響とみられないこともない。しかし猫は片目をつぶされて死ぬという犠牲を支払っており、猫が全部の筋書きを書く結託型とも一線を画している。『礦石集』的な話から結託型に変化したとも考えられ、この話の猫は和尚と親しいことから落差は小さい。管見に入った近世初期までの火車説話で火車を猫とするものが皆無であることから考えると、元禄より前に昔話として結託型の「猫檀家」が広く流布していたとは考えにくい。

現在採集されている「猫檀家」の昔話の中にも『礦石集』の猫が片目をつぶす話の系統のものがある。福田晃が収集した各地の事例を見ると、⁽²²⁾山梨県の旧西八代郡上九一色村の話は貧乏寺の和尚が食えなくなつて三毛の雄猫を寺から出そうとすると、猫は長者の母の葬式のとときの策を与える。棺が空中に上がり、和尚が数珠を投げると降りる。寺は繁昌するが猫は数珠が当たつて片目になった。

奈良県宇陀市（旧宇陀郡神戸村）では天和年中（一六八一〜八四）、百姓七兵衛の妻の葬式で雷雨が起こり、光明寺の憲海上人が棺に袈裟を巻き本尊の箱を投げると晴れた。そばに猫が死んでおり、本尊が当たつて一眼になつている。これ以来本尊を猫たたき如来というようになった。

岡山市甲浦の話では円蔵院の和尚が居眠りしていると、寺の古猫がよその猫と死体を盗む話をしている。和尚は雨具を用意して葬式に行き、雷雨になると棺の上に坐つて数珠を振りながら読経する。後に和尚が化猫を退治すると猫は数珠で打たれて片目になつていた。

岡山県小田郡矢掛町では、東三成の山寺の和尚が猫が踊るのを見て追いつ出す。数年後猫が来て、明日の葬式で雨が降つたら水晶の数珠で棺を一つ叩けば自分の目が一つ飛び出し、二つ叩けば両目がなくなるとい

う。葬送で雷雨になり、他の和尚は逃げるが山寺の和尚は棺にまたがり数珠で棺を叩いて死体を守り有名になる。後に侍が化猫を退治するが、片目だったので寺の猫だらうといわれた。⁽²³⁾

香川県三豊市（旧三豊郡吉津村）の話では、弥谷寺の和尚の飼ひ猫が猫又になり、明日は天霧山の猫又と弥谷山の猫又が死人を取るが、天霧山の猫又の代わりに私が出るようになったと教えて策を受ける。雷雨のとき和尚が数珠で棺桶の端を叩くと空は晴れるが、猫又は片目になつていた。⁽²⁴⁾

福田が指摘するように東日本、ことに東北地方には猫と和尚が結託する典型的な「猫檀家」が多いが、西日本では猫を魔物とする話が目立つ。その中でもこのように猫が片目になる話がいくつかあり、『礦石集』に近い話が口承話としても広まっていたことを示している。また猫と和尚の関係を見ると、これらの話の間でも結託型（山梨県）から『礦石集』のように猫が自分の目をつぶすことになる策を受ける話（岡山県矢掛町、香川県）、『多満寸太礼』に近い対決型（奈良県、岡山市）までのスペクトルを持っている。

『礦石集』は他に「猫の踊り」や「鶏報恩」も収録していることからみて、当時の口承話を比較的忠実に採録したのでらう。編者も「洛陽の老宿」つまり京の年長の僧が語つた話をそのまま記したと述べている。ただ昔話資料集の梗概からは、これらの昔話の死者がとりたてて悪人であったとは見られないので、僧侶だった『礦石集』の編者またはやはり僧侶の話者が仏教の火車を念頭に悪人の設定を加えたのかもしれない。おそらく東北地方に多くある結託型の「猫檀家」はこのような形から分化したもので、『大悲呪』の「なむからたんのう」とらや「やー」を持つ話が多いことから、曹洞宗の檀徒の多い地域に比較的後世に流布したものと考える。

それにしても、『礦石集』や『多満寸太礼』のような話はこれまで見

てきた中世以来の火車説話の展開過程から飛躍して、しかも話として整った形態で猫が登場させているのがやや唐突な感じを与える。

宝暦二年（一七五二）の序をもつ甲斐国の地誌『裏見寒話』巻二では、甲府市の時宗の名刹一蓮寺の項で「手形傘」を紹介している。中古の寺に剛力の住僧があり、人々は朝比奈和尚と読んだ。あるとき葬礼で雷雨になり、黒雲が堂内に舞い下りた。雷が龕の上へ落ちかかり、雲から大きな手が和尚を掴んだ。和尚もしばし争い、ついに雲から怪異な獣を引き下ろして組み敷いた。そのうち空は晴れ、怪物は雲がないため帰れず、命乞いをした。和尚はこれからは時宗の亡者を妨げたり、在俗の家でも時宗の檀家には雷を落とすなど約束させた。証文を書けと言ったが怪物は字を知らないというので傘に手形を押させた。今でもこの長柄傘を葬送には必ずさすという。六月の虫干しに諸人に見せる。手の跡は猫の類か、猫よりはずっと大きいという。河童の詫び証文のような話である。

もし中世末から近世初期に伝承されていた、雷または火車が死体を奪う話に猫を組み入れるとすれば、『裏見寒話』のように和尚が雲から引きずり出してはじめて正体がわかるといのが自然だとも思われる。もとより文献への掲載は偶然に左右されるから、口承の世間話の世界ではそういう話が「猫檀家」のような話よりも前に成立していたのかもしれないが、文献的にはいまのところ『裏見寒話』より半世紀も前に「猫檀家」的な話が登場するのである。

しかし考えてみると、『裏見寒話』のような形で猫が登場させても、ふだんに人に飼われているはずの猫がなぜいきなり野辺送りの空に現れるのか、十分に説明することができないだろう。『裏見寒話』の怪物も手形が猫のようだというだけで、自分から猫だとは名乗らなかつたし、明確に猫の姿だと描写されてもいない。そう考えると、飼い猫に自分の本性を語らせる『礪石集』や「猫檀家」のような話がまずあって、それを

前提として『裏見寒話』のような物語が出現したのかもしれない。

それにしてもなぜ火車は猫なのか。これは「はじめに」で紹介した各地の火車の事例にもあったように、遺体を安置した上に刃物を置いて魔除けとすることの由来として猫が死体をまたぐと死体が動き出すという俗信が広く分布していることと関係があるろう。中国では「僵尸」という動く死体の伝承が多いが、中国でも猫が僵尸と関係づけられている。澤田瑞穂「僵尸変」によると、

ある人が死んだ。家人は遺骸を室内の木板の上に横たえて置いた。夜間に一匹の猫がその上にきてから、たちまち僵尸に変じ、板の上から這い出して裏口から出ていった。家人これを秘し、平日の衣服を代りに入れて納棺した。幾年か経つと、家の鶏や家鴨がよく失われる。猫にでも食われたものと思つて家人は気にも留めないでいた。ある日、一和尚が訪れ、僵尸が鶏などを取つて食うことを教える。その晩、家人は家をあけて他処に避ける。老和尚ひとり燭を点じ、帚を手にして室に坐する。夜半に物音がしてかの僵尸があらわれ、和尚に跳びかかる。身を躲して帚を投げつけると、僵尸は地に倒れて動かなくなった。（中略）（鄭亭生『中国民間伝説集』の「僵尸与老和尚」）

筆録者によれば、この伝説は長江流域に流布する。人が死んだとき、猫が屍体の傍を通ると復活して、人を見ると抱きつき、人の口から息を吸う。吸われた人はすぐに倒れて死ぬ。ただし脚は硬直しているの、押し倒せば起き上れないという。

中国の僵尸も帚を投げると倒れるなど、日本との共通点が多く、日本の伝承は中国の影響であろう。また東欧のスラヴ諸民族の間に伝承されていた吸血鬼も、猫や鳥などの動物が飛びこえることによって生じるとされていた。

ただ僵尸や吸血鬼は妖怪として独自の存在感を持っているが、日本で

猫がまたいで動き出した死体はそうではない。動き出す瞬間の恐怖に話の重点があり、そのあとは箒を投げつけられて倒れるだけで、独自の妖怪として活動する話は現行民俗ではあまり伝えられていないようである。

猫に関する怪異譚は昔話としては「猫と南瓜」「鶏報恩」「猫の踊り」「鍛冶屋の婆」「猫と釜蓋（猫と茶釜の蓋）」「猫又屋敷」「鼠退治」など種々伝えられており、日本各地で猫が普通に飼われるようになった時代に、これらの話も広まっていったのだろう。「猫と南瓜」のカボチャ、「猫と釜蓋」の鉄砲など南蛮渡来の産物が重要な役割を果たす話は、その成立年代もこれらの渡来普及以後と判断できる。前述の元禄六年（一六九三）刊『礦石集』巻一は「猫檀家」的な話とともに「鶏報恩」「猫の踊り」を事実談扱いで収録し、猫が大名の母に化けるといって「鍛冶屋の婆」に似た話も収録している。寛文三年（一六六三）刊『曾呂利物語』巻三第五話「猫またの事」や延宝五年（一六七七）刊『宿直草』巻四第一話「ねこまたといふ事」では、深夜に山でぬた待ち（湿地に来る猪などを待ち伏せして射る狼の一種）をしていた男が妻（宿直草では母）が来るのを見て妖怪だと思つて射たが、血が家まで続いており、妻（母）は無事だったが飼ひ猫が縁の下で死んでいたとする。これらも狼梯子のモチーフはないが「鍛冶屋の婆」に近い。十七世紀の怪談集には猫の話がかなり多く、この時代には猫が広く飼われるようになっていたことがうかがわれる。またこれらの話は家で飼われていた猫が実は化けていたという点で、『礦石集』や『多満寸太礼』に載せられた「猫檀家」に近い話とも通ずる。これらの猫の怪談の広がりや背景にして『礦石集』などに収録された話が登場したのだろう。一方、結託型の「猫檀家」は猫が和尚のために一肌脱いで檀家を騙す話だから、妖術を使える点では共通するといえ、怪談の猫とはキャラクターが異なり、後次的に発生したものと見たい。

『多満寸太礼』には猫が死体を動かす話もあった。美濃国不破郡の豊かな農民が城下の商人に娘を嫁がせたが、その後娘を取り戻した。娘は婚家に残した子に会えないのを悲しみながら病で死んだが、一夜明けると死人が蘇った。しかしものも言わず、時々木の実や果物を食うだけで茫然としていた。神子山伏の祈禱も効果がなかったが、霊仏の薬師の別当に頼んで理趣分を繰ると、三日目に飼ひ猫が病人の前で血を吐いて死に、病人は倒れた。猫が見入って三十日あまり過ぎていたという。猫が死体を動かすという話としては管見に入った中で最も古いものだが、死体はただ茫然と座って木の実を食っているだけというのは少々情けないものがある。日本では猫が死体を動かすという俗信が入っただけで、僵尸のような妖怪譚全体は伝播しなかったらしいが、猫が死体を動かすことができる魔物だという話から、死体を奪う火車が猫であるという設定が発生したのだろう。

ただそれにしても、猫が化けたものが死体を取るのであれば、悪人の死体に限るような嗜好を示すだろうか。『礦石集』の猫は悪人の死体を取る性格を残していたが、『多満寸太礼』や「猫檀家」の昔話はそうではない。火車は死体を取りたいから取る妖怪への道を歩むのである。

4 妖怪としての火車

火車が猫であるという近世説話は前述の『礦石集』『多満寸太礼』『北越雪譜』のほか、文政十年（一八二七）に上演された鶴屋南北の『独道中五十三駅』（ひとりみちごじゅうさんえき）四幕目には駿河の宇津ノ谷峠の猫石の精霊が火車になって屍を奪う話があり、精霊はみずから「名付てこれを火車といふ」と名乗っている。しかし説話や随筆に火車が登場しても、必ずしも猫とされない正体不明のものが多いし、猫以外のものが火車になるとされることもある。たとえば寛保二年（一七四二）の序がある『老嫗茶話』巻二「山寺の狸」では、山寺の和尚が「狐狸千歳を経て怪をなす。

狸の年経たる、能雷雨を起し人の死骸をさらひ取。是を人化者火車といふといへり」と話しており、火車は狸だということ。

宝永六年（一七〇九）刊『大和怪異記』巻七第一話「久右衛門といふもの天狗にあふ事」では、丹波国福知山領多和村の久右衛門が鹿を狙って深夜に猟をしていると、天狗倒しがおびたじかつた。豪傑の久右衛門が手を叩いて笑うと、空に白布を引いた。弓で叩くとほとほと鳴った。そのうち左手の方から物が落ちかかるのを弓で射ると、傍の沼に落ちた。近付くと黒井村の六兵衛の死体だった。宿に帰って黒井村に人をやって尋ねると「過し夜身まかりしを、火車にとられし」とのことだった。射た場所を調べると死骸はなかったが落ちた跡があったという。この話では題名を含め、火車は天狗のように描かれている。火車が狸や天狗であるというのは猫の火車から変化したのではなく、それとは独立して火車に結びついた解釈かと思われる。

寛延二年（一七四九）刊『新著聞集』第十、奇怪篇「葬所に雲中の鬼の手を斬とる」では旗本の松平五左衛門が従弟の葬礼に行くと龕の上に黒雲がかかり、雲から熊の手のようなものが出たので抜き打ちに斬った。恐ろしい爪が三つあり銀の針のような毛が生えたものを切り落としていた。それからこの刀を「火車切」と名づけて所持したが、諏訪若狭守の所望で与えたという。『裏見葉話』の一蓮寺の和尚が組み敷いた怪物と同じく、猫のイメージは残しているが猫そのものでもない怪物であろう。なお軍書『甲陽軍鑑』品第四十三には、多田淡路という武士が「既に信州こくうさう山の城にて、くわしやを伐程の此末きれてみへす」という記述があり、不明部分はあるが「くわしや」（火車）を斬った武将の話も近世初期からあった。もし『甲陽軍鑑』に高坂昌信が書いた部分があれば、この記述も戦国期に遡る可能性があるが、判断は難しい。

十八世紀後半の根岸鎮衛『耳囊』巻之四「鬼僕の事」では、芝田某という人が普請の用で美濃へ赴いた。出発前に僕を雇って召し連れられた

が、ある夜宿で夢ともなく僕が枕元に来て、自分は人間ではなく魍魎おにというものだ、暇をいただきたいと言った。子細を尋ねると、順番で死人の亡骸を取る役があり、今度その役に当たったので、この宿から一里ほど下の百姓何某の家の死人を取ると言った。翌朝この僕がいないので驚き、百姓某のことを尋ねると、その母を今日葬送したが野道で黒雲が覆い、棺の中の死骸を失ったと言われていっそう驚いたという。文政二年（二八一九）序の『茅窓漫録』の「火車」も中国の諸書を引いて、火車とは魍魎だと論ずる。

『耳囊』や『茅窓漫録』は「死体を奪う妖怪」の存在は受け入れながら、それを仏教の火車ではなく魍魎とするところが、儒教の影響の強い近世の武士知識人層の思考を表しているようだ。しかしそればかりではなく、臨終の人の目に見える古典的な火車と、死体を奪う火車との距離があまりにも大きくなり、いわば火車とカシヤが別物のように受け取られるようになったことの表れでもある。

これらの近世の諸例は死体を奪うものを「火車」と記するのが普通で、この点は中世末から近世初期の話で死者を悪人とするのが一般的でありながら「火車」の名称を用いることは比較的少なかったのと対照的である。民俗学の採集資料では多くカシヤと片仮名で書かれるが、これらの史料は漢字で「火車」と書いているのだから、筆録者は仏教の火車を知っていたであろう。しかし名前とは異なってこれらの「火車」はもはや悪人を地獄に連れ去る性格を失い、死骸を取ること自体が目的のようになっていくことが多い。すでに『多満寸太礼』がその傾向を強く示していた。火車が猫や狸や魍魎なら、悪人を罰する仕事に従事するのではなく自分の都合で死体を奪うだろう。それと表裏の関係にあるが、火車を阻止する僧や武士の活躍が話の興味の中心になっている。「猫檀家」の昔話に至っては、寺を立派にできる財力のある家の死者ということだけが条件である。おそらく火車が悪人を取る地獄の使いの性格を失う過

程が先に進行しており、その結果として火車の「正体」をめぐる猫をはじめ狸、天狗、魍魎などの解釈がなされるようになったのだろう。獣のイメージは近世の「雷獣」から来たところもあるのかもしれない。²⁸

もっとも近世にも悪人であるために火車に遭う話も続いている。臨終の火車については第二章1「火車に引かれる人々」で紹介したが、死体を奪われる話もいくつかある。寛保二年（一七四二）の序がある『老嫗茶話』巻三「亡魂」では、下野の宇都宮上川原町の長嶋市左衛門の妻が邪見で、子がないため養子を取ったがその養子を憎んで殺した。その後死霊に取り付かれて狂死したが、宇都宮の清閑寺への野辺送りの途中で雷雨となり、黒雲が棺を奪おうとした。清閑寺七代の上人は山本勘助の孫で、棺を取られなかった。しかし火葬にするとき棺の中から青い火が出て自然に焼けた。これは業火だという。寛文十九年（ママ）のこととする。

同書巻五「久津村の死女」では、奥州岩城領の百姓庄三郎の女房たつは慳貪邪見で人をそねみ、二十人を呪い殺したが三十七歳で死んだ。僧が髪を剃ろうとして剃刀を当てると亡者は手を上げ頭を振って剃らせなかった。鬼のような形相に変化したので僧は用心して葬送したが、雷雨となり黒雲が棺に覆いかぶさったので人々は逃げた。夜明けに行ってみると棺は砕けて死人はなかった。元文四年（一七三九）のことだとする。

このような例もあるが、近世後期になると死体を奪われる話の多くは死者の善悪を記さない。妖怪の火車が何のために死体を取るのかは、話の中では明確に語られない。猫や獣であれば食うためとも考えられるが、その記述のある話は近世には見出ししていない。新潟県などに伝わる弥三郎婆の伝説では死体を食べたとするものがある。新潟県柏崎市久木太では弥三郎の母が鬼婆になり、弥三郎が山で狼に襲われたとき狼が鬼婆を呼んできたので鉋で斬りつける。家に帰ると母は鉢巻をして寝てい

る。その後赤ん坊を食べたので弥三郎が斬りかかると鬼になって破風から飛び出し、弥彦山へ行った。一説では弥三郎婆はその後八石山の岩屋に住み、赤い長柄の傘に赤の衣を見ると葬式だと知って棺をさらい、死人を食べた。飛岡の浄広寺の和尚が一計を案じ、青の日傘に青の衣に改めたら、棺を奪われることがなくなったという（『柏崎市伝説集』²⁹）。この話は火車説話の一種といえるが、弥三郎婆の伝説は弥彦山周辺など新潟各地に伝わるのを含めて「鍛冶屋の婆」型の話を中心があるので、この土地ではそれに火車が取り入れられたと思われ、死体を食うのは火車の一般的性格とはいえないだろう。もともとの悪人を地獄に連れて行くという設定は失われたが、それを補うような死人を奪う理由は考え出されなかった。他の多くの妖怪もそうだろうが、火車は「葬送のさい雷雨になる」という実際の現象および「葬送のさい死体が奪われる」という噂の中の現象を妖怪化したものであり、弥三郎婆のような別の話を取り入れない限り、独自の生活などの奥行きは本来持っていない。

火車が人間に死体を奪われたり、自分から死体を捨てたりする話がある。天和四年（一六八四）序の『古今犬著聞集』巻十二「慳貪女、生キながら瓢事」では、大村因幡守が船で備前の浦辺を通っていると、黒雲が近付き、雲の中から「あらかなしや」という声が出た。船の上に雲が来たとき雲から足が下がっているのを引き下ろすと死んだ婆だった。訝しく思っていると浦で里人が騒いでいるので足軽に尋ねさせたところ、材木屋の邪慳放逸の母が雲にさらわれていったと話した。婆は生きながら空にさらわれたので雲の中から叫んだのだろうが、引き下ろすと死体だったというのは葬送のとき死体を奪われる話がもとにあったための混乱であろうか。この話では死体を引き下ろされても火車は抵抗しない。

大田南畝『半日閑話』「屋根に溺死人落つ」では、寛政十二年（一八〇〇）四月七日の昼、浅草堀田原の堀筑後守の屋敷の屋根に物が落ちる音がした。怪しんで調べると日を経た溺死人だった。寺に葬り、秘して

人に語らなかつた。火車というものが取って捨てたのか、腐乱して見分けがたかつたとある。火車は死体を取っても腐るまで空を引き回しているのだろうか。

これらの奇妙な話は、もともと墮地獄の表象だった葬送時の雷雨が次第に変遷して死骸を取る怪物にまでなったが、それ以前の歴史の多くを引きずっているため、独自の妖怪として見た場合には奥行きが足りないところが露呈したものだともいえよう。

おわりに

臨終の人の目に見える火車から死体を奪う怪物までの変遷を見てきたが、火車がここまで性格を変え、善悪を問わず人の死骸を奪うようになる必然性はあったのだろうか。

これについては、火車の話が単なる昔話ではなく、実際に某家で火車に死骸を取られたという噂が流布することがあったことに注意する必要がある。第一章2「雷の火車」で紹介した最上孝敬の調査⁽³¹⁾では、千葉県の一調査地ではその土地の旧家がかつて葬送中に死体を奪われたのがカラダメ（空茶毘）の起源だと伝えるため、人々はカラダメについて語るのを憚った。一方、別の調査地でも同様の伝承を持つものの、ここでは死体を奪うものを高僧が袈裟を投げて撃退したとされることから、空茶毘について話すことを忌避することがなかった。

もし火車や雷に死体を奪われることが、その死者が悪人であるからだとすれば、このような噂を立てられることはその死者の評価、ひいては家の評価に直結するから、遺族も安心できないであろう。中世後期の葬送の雷雨はまさに墮地獄の証拠として話されていた。しかし火車が死体を奪う妖怪にすぎないなら、火車が襲来したという噂は死者の善悪と結びつかないから、世間話として気楽に話すことができる。火車が次第に

妖怪化することにはこのような社会的背景があり、単なる妖怪としての火車が悪人を取る火車を「淘汰」していったのではないか。

禅僧の火車退治譚の流布にも妖怪への方向性が内在していたのかもしれない。第二章2で述べた曹洞宗の僧の火車撃退説話では死者が悪人とするものが多かったが、悪人の死体が火車に奪われる話に馴染んでいた聞き手の中には、いかなる罪人でも僧の力で火車から守られることに違和感を持つ人もいたであろう。『驢鞍橋』の徳川家康が死体を「なぜくれてやらなんだ」と問うたのはそういう疑問からだったのではないか。高僧の火車撃退譚を語り伝えるなら、死者が悪人ということにしない方が収まりがよい。といった心理から悪人の設定が脱落すれば、その反作用で火車は獄卒から妖怪へと重心を移すことになる。近世初期の『漢和希夷』の雲洞庵の僧が火車から守った死者も、すでに悪人とはされていないなかつた。

また僧と猫が結託する「猫檀家」は曹洞宗寺院に伝えられている場合もある⁽³²⁾ので、僧が広めた面もあったかもしれないが、これは猫の報恩譚であると同時に、煎じ詰めれば「火車事件は寺院の自作自演である」という話である。このような話が成立する背景には、各地の禅宗寺院が僧の火車撃退を事跡として宣伝することへの批判的意識があったと見られる。この話の火車は飼い主の僧以外の誰が祈っても棺を下ろさないのだから、火車の方が僧の法力より強いことにもなる。お寺が伝える火車退治の話は、実は「秘密が保たれた猫檀家」ではなかつたのか。ユーモラスな昔話だが、檀家の民衆が坊さんを笑いの対象にしてゆく視線も感じさせる。

妖怪については柳田國男がハイネにヒントを得た神の零落説をはじめとして多くの研究や解説があるが、歴史的に扱うのはなかなか難しい。その中であつて火車は仏教の説が元であるのが明確であり、各時代の史料が比較的そろっており、段階を追って変遷したようすを明らかにしう

る点で他の妖怪には少ない好条件を持っているといえるだろう。白昼に現れて葬送の途中の死骸をさらうのも他の妖怪には少ない劇的なふるまいであり、しかも全国に出没している。

妖怪が神から零落したという説をそのまま受け入れることは現在の研究段階ではできないが、意外にも火車は地獄へ罪人を引っ立ててゆく本来のありようから、猫や狸や魍魎へと「零落」したと見ることもできるかもしれない。それとも閻魔王宮の職員から独立自尊の妖怪へ「上昇」したというべきだろうか。もともと筆者は妖怪研究に詳しいわけではないので、火車の変遷からさらに進んで「妖怪」というものをどう理解するか、という問題にまで踏み込むことはできなかった。

また変遷の各段階を示すことと、段階ごとの移行のプロセスを明らかにすることは別のことである。この稿でも「葬送のときの雷雨が墮地獄の証拠とされる」段階から「葬送のさい雷などが死体を奪う」という段階へは飛躍があるが、死体消失のモチーフが何に由来するのかは明らかにできなかった。また火車が猫と結びつく過程についても、より詳細な説明が必要である。今後とも検討を進めたいが、それとともによい史料が発見紹介されることを期待したい。

俗信に関する国立歴史民俗博物館の共同研究に参加するにあたり、これまで自分が専門にしてきた中世の葬送儀礼を扱うことも考えたが、葬儀はある意味では俗信の塊のようなものであるにしても、これまでの研究の繰り返しになりかねないことや、この共同研究で設定された目標の一つが妖怪であることから、葬送に関連した妖怪として火車を選んだ。このテーマはかなり前から温めていたが、今回発表の機会を得ることができたことに感謝したい。また火車の史料収集にあたり、安沢出海氏のサイト「火車の資料」を参考にした。記して謝意を表す。 <http://www.geocities.jp/izumikawauso/ronbun/kasha.html>

註

- (1) 佐藤義則『羽前小国郷の伝承』（岩崎美術社、一九八〇年）七〇～七二頁。
- (2) 今野円輔『檜枝岐民俗誌』（日本民俗誌大系 第九巻、角川書店、一九七四年）三三頁（初出は刀江書院、一九五一年）。
- (3) 『群馬県史 資料編26 民俗2』（群馬県、一九八二年）二二三～二五頁。
- (4) 瀬川清子『日間賀島民俗誌』（刀江書院、一九五一年）八一頁。
- (5) 高谷重夫「祖谷山村の民俗」（日本民俗誌大系 第一〇巻、角川書店、一九七六年）二九六頁（初出は『ひだびと』九巻一号、一九四〇年）。なお「クワシヤ」の表記は現代では「クワシヤ」となるべきもので、日本民俗誌大系が旧表記の「クワシヤ」を現代表記に直すにあたって不正確に表記したものかと思うが、民俗誌大系のままとした。
- (6) 小泉弘・山田宗全校注『宝物集』（新日本古典文学大系40『宝物集 閑居友比良山古人霊託』岩波書店 一九九三年）の脚注を参考にした。
- (7) 勝田至「死者たちの中世」（吉川弘文館、二〇〇三年）第三章・第四章。
- (8) 勝田至「中世後期の葬送儀礼」（『中世の墓と葬送』吉川弘文館 二〇〇六年）一九九～二〇〇頁。
- (9) 中市謙三『野辺地地方』（日本民俗誌大系 第十二巻、角川書店、一九七六年）四八九頁（初出は『旅と伝説』第六巻七号 一九三三年）。
- (10) 最上孝敬『靈魂の行方』（名著出版、一九八四年）九二頁。
- (11) 同右、一〇〇頁。なお最上氏の著書については山田慎也「火車」（『日本民俗大辞典』吉川弘文館、一九九九年）に教えられた。
- (12) 富士昭雄「奇異雑談集の成立」（『資料紹介 漢和希夷』（『駒澤国文』九号、一九七二年。のち富士昭雄編『江戸文学と出版メディア—近世前期小説を中心に—』笠間書院、二〇〇一年に再録）
- (13) 堤邦彦「火車と禅僧—近世奇談文学の淵源」（『近世説話と禅僧』和泉書院、一九九九年）九二頁。
- (14) 同右、九三～九九頁。
- (15) 阪口弘之校注『牛王の姫』（新日本古典文学大系90『古浄瑠璃 説経集』岩波書店、一九九九年）。
- (16) 堤邦彦、前掲「火車と禅僧—近世奇談文学の淵源」一〇六～一〇九頁。
- (17) 『新版 静岡県伝説昔話集』下巻（羽衣出版、一九九四年）九八～九九頁。一九三四年に静岡県女子師範学校の郷土研究会が発行した『静岡県伝説昔話集』を現代表記にしたもの。なおこの話の伝承地の磐田郡佐久間町は現在の浜松市天竜区佐久間町。

- (18) 関敬吾編『日本昔話大成 6 本格昔話五』(角川書店、一九七八年) 六二～七五頁。
- (19) 福田晃「『猫檀家』の伝承・伝播」(『昔話の伝播』弘文堂、一九七六年) 一〇四～一五一頁。なお福田晃「『猫檀家』」(『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年)に分布図を掲載する。
- (20) 山田巖子「火車説話の受容と展開」(堤邦彦・徳田和夫編『寺社縁起の文化学』森話社、二〇〇五年)。
- (21) 堤邦彦、前掲「火車と禅僧―近世奇談文芸の淵源―」一〇一～一一二頁。
- (22) 福田晃、前掲「『猫檀家』の伝承・伝播」。
- (23) この話の記述は福田論文のほか、『日本昔話通観 第19巻 岡山』(同朋舎、一九七九年)を参考にした。
- (24) この話も福田論文のほか、『日本昔話通観 第21巻 徳島・香川』(同朋舎、一九七八年)を参考にした。
- (25) 澤田瑞穂「修訂 鬼趣談義」(平河出版社、一九九〇年) 二八四頁。
- (26) たとえばセルビアでは、ヴーク・カラジッチ『セルビア語辞典』(二八一八)によると「まともな人間は吸血鬼にはなり得ない。なにかの鳥が彼の屍体の上を越えて飛ぶか、ほかのなにかの動物が飛び越さないかぎりには。そのため、人々は絶えず屍体をなにかがその上を越えて行くことがないように見守っている」(栗原成郎「スラヴ吸血鬼伝説考」河出書房新社、一九八〇年、二五～二六頁)という。
- (27) 郡司正勝他編『鶴屋南北全集』第十二巻(三一書房 一九七四年)。この資料については二〇〇八年六月一四日に国立歴史民俗博物館で報告した際、横山泰子氏からご教示を得た。
- (28) 雷獣が猫のようなものだという説も近世にはあった。『甲子夜話』巻二、第三十三条によると出羽国秋田は雪が深いが冬に雷が鳴る。落雷のたびに雷が落ち、形は猫のようだと秋田の支封佐竹彦岐守(義純)の叔父中務が語ったとする。秋田侯の近習某は家の屋根に雷が落ち、雷獣がいたのを捕獲して煮て食べたという。
- (29) 『相崎市伝説集』相崎市教育委員会 一九七二年 一三九～一四〇頁。
- (30) 京極夏彦「モノ化するコト 怪異と妖怪を巡る妄想」(東アジア怪異学会編『怪異学の技法』臨川書店、二〇〇三年)は「ぬりかべ」を例に現象(コト)が妖怪(モノ)化する傾向を論じている。ただ火車の場合、初発に仏教の火車があり、その後の展開過程でもこの典拠の記憶がまったく失われたことはないと考えられる点で、純粹な「コト」とはいえないところがある。
- (31) 註(10)に同じ。
- (32) 長野県上水内郡小川村瀬戸内の曹洞宗法蔵寺に昔猫がいた。法衣の掛け方が朝になると違い、裾が濡れているので和尚が夜中に見張ると猫が法衣を着て境内の堂に獣を集めて説法した。翌朝和尚がほめると猫は姿を消す。千見(大町市)の郷主の年寄りか死に、猫がその上を飛びこえたので死体が暴れ、説経でも治まらない。死人が「おれは古山の法蔵寺でなげりや助からねえ」と言ったので法蔵寺が呼ばれ、無事葬儀を済ませた。これから千見の七十五軒が法蔵寺の檀家になったので猫檀家と呼ばれるという。(『日本昔話通観12 山梨・長野』同朋舎、一九八一年、一〇五～一〇七頁)
- 新潟県阿賀野市折居の曹洞宗岩村寺は猫寺と呼ばれる。二代柏葉が雲水のころ折居に庵を結び黒猫と暮らした。ある夜猫が夢枕に立ち、寿命がきたので最後にご恩返しをしたい、あす北の方から迎えが来ると言った。翌朝猫は死んでいた。そのころ新発田溝口家の御用金を預かる岩村家では、主人忠左衛門の母の葬式の最中に棺が空中に舞い上がった。多くの僧が説経したが効果がなく、易者が折居庵の雲水を呼べと言った。柏葉が説経すると棺は元の場所に戻った。岩村家では本堂と水田二町歩を寄進し、猫の墓も建てて供養した。猫の墓は今も残っている。(小山直嗣『越佐の伝説』野島出版、一九七三年)
- 岩手県二戸市浄法寺町の曹洞宗福蔵寺に伝えられる伝説では、住職の母がトラという猫を三十年飼っていたが、母の夢にトラが現れ、長々お世話になったが暇をいただく、住職も出世されるだろうと言った。その後南部の殿様の葬式で棺が巻き上げられたが、住職大突の祈念で降りたので寺門は繁栄したという。大突は猫塚を築いて猫を弔ったが猫塚は現存しない。しかし大正十一年、大般若堂の修理のさい天井裏から猫の頭蓋骨が発見されたという。二戸市商工会のサイト「猫塚物語」による。
- (33) <http://www.shokokai.com/ninohe/minwa/j-minwa4.html>
第二章2で触れた「火車落としの袈裟」を伝える新潟県南魚沼市の雲洞庵について、北に一〇〇キロ近く離れた五泉市(旧中蒲原郡村松町)で採集された昔話は「猫檀家」の話を語り、雲洞庵の本尊は三毛猫だとしていた(『日本昔話通観10 新潟』同朋舎、一九八四年、四〇三頁)。
- (34) (菅屋大学・京都光華女子大学非常勤講師、国立歴史民俗博物館共同研究員)
二〇一一年七月一四日受付、二〇一一年一月一日審査終了

Birth of Kasha

KATSUDA Itaru

Kasha, which emerges in modern folklore, is a kind of monster which appears in the sky over funeral processions and carries away the dead. The monster is often identified as a cat, and “nekodanka,” which is an old tale of a cat playing tricks together with the priest of a poor temple to make the temple prosper, is also known in various places.

Kasha was originally a Buddhist carrier that allegedly took villains to hell. However, when kasha is portrayed as a monster, its Buddhist character is weakened, and the dead taken by kasha are not necessarily villains. The first half of this article clarifies the connection between kasha in Buddhism and kasha as a monster, using medieval materials. During the Muromachi period, kasha for the death was “externalized,” and thunderstorms were considered to represent going to hell, while in the last half of the 16th century, the story of thunder carrying away the dead appeared. At the same time, at the end of the Sengoku period, the story of a Zen Buddhist monk defeating kasha gained ground. People’s concerns about thunderstorms at funeral processions are connected with the fact that in the last half of the Middle Ages, gorgeous funeral processions of the upper classes attracted many spectators.

It seems that kasha were first identified as cats in the late 17th century. In early modern times, kasha were also identified as raccoon dogs, tengu, moryo, etc., leaving Buddhism and beginning to walk alone as unique monsters. The traditional story of kasha, which appears at the death of a villain, was continued until early modern times, but in the story of kasha as a monster carrying away the dead, the dead was often not villains. If kasha still had the character of a monster which carries away people to hell, the rumor that kasha took the dead might have tarnished the reputation of the latter. For this reason, the character of kasha as a tormenting devil in hell would have gradually been weakened.

Key words: Kasha, hell, nekodanka, funeral